

---

# 黒ウサギ隊の5人組（仮）

田中太郎

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

黒ウサギ隊の5人組（仮）

### 【Nコード】

N1007Z

### 【作者名】

田中太郎

### 【あらすじ】

ドイツ軍には、特別技術課という部署があった。その部署の人間は、とにかく変わり者で男ながら、ISを動かせる男まで存在する始末だ。そんな彼らが、ISの物語を引っかき回す。

## プロローグ（前書き）

駄文ですが、よろしくお願いします。

全200話を予定しています。  
長丁場ですね。

## プロローグ

IS インフィニットストラトスの登場によって世界は変わった。  
女尊男卑の世界に変わった。

何故なら、ISは基本的に女性にしか反応しないからだ。

そして、その女尊男卑は軍隊にまで及んでいった。

ある日のドイツ軍基地…

金髪の男性がため息をつきながら歩いていた。

「ハア……」

そして、特別技術課と書かれたプレートのあるところへ入る。  
中には、4人ほどの人が居た。

「皆、聞いてくれ。」

金髪の男性は、その金髪を掻き上げ言うと4人は、金髪の男に注意を向けた。

「今日の新パーツ、次世代型ミサイル試作機ver2.5のテストは中止になった。」

（くそ、最近こればっかだ…）」

金髪の男も落胆しているように、他の4人も目に見えるように落胆している。

「またですか？これで138回目ですよ？」

語尾を伸ばして喋る長い黒髪に黒メガネの青年は、バルト。

「また、ISつか？うざいつすね、IS！」

部活等の後輩の様な喋り方をし、短髪の男はカーター。

「……………（、・・・、）」

無言の彼は、ジャン、ニット帽をかぶっており、一度も外したところ見た事がないそう。ちなみ、FPSをすると人が変わるらしい…

「それで？一応理由を聞きましょう。」

茶髪に眼鏡で丁寧な口調のおっさん（今年35歳）はアロン。似非紳士だ。

「カーターの言うとおり、ISの模擬戦をやるからそこだけ…！だそうだ…」

そして、この金髪の男はアルフレッド、通称アル、ちなみにこのリーダーである。

「やっぱりですか…」

アロンは、少しだけ残念な顔をする。

そして、部屋の空気が重くなる。  
するとアルが…

「ま、こういう時は…呑みますか！」

そう言つて、どこからかウイスキーと人数分のグラスを出す。

「おお！太っ腹っすね！いつもは、安いカップ酒なのに…」

カーターは、嬉々として、そのグラスを受け取り、ウイスキーが注がれると思いつきり破顔する。

「……………（＾Ｏ＾）／」

ジャンは、声には出さないがうれしそうな顔をしている。

「いいのですか？勤務中ですよ？」

アロンは、そんな真面目な事を言っているがしっかりとグラスを持っている。

「細かい事は、気にするなですよ〜」

にこにこしながら職務放棄宣言する、バルト。

そして、全員にウイスキーが渡った。

「それでは、か      『ちょっと待って下さい。』……なんだよ?」

アルが乾杯しようとする、アロンによって遮られる。

「そういえば、今日、なんか初めて男がISを動かしたそうですよ。」

アロンは、メガネを押し上げる。

「おお!そいつは、すごいな!ドイツからもでないかな?」

「そうです。それを確かめるために、とりあえず今ドイツ軍では、ISを

各部隊ごとに回しているんです。ちょうど家に回ってきているのですが、

私たちは、全員試しましたので後は、アルだけです。」

アロンが長々と説明をしていると、カーターがISを何故か、かっ  
いでくる。

「ふん…(あいつらは、ダメだったのか…)それじゃ、試してみ  
るか!」

アルがISに触れるとキンと、甲高い音を上げて、起動する。

「……………!と、とりあえず、上に報告を…」

「そ、そうっすね。」

「……………（＋―＋）」

「さ、さすが」

「……………mjk」

いち早く石化の解けたアロンが上に電話をかけるが、他の人たちは、皆動揺している。

そして、当人であるアルは…

「……………（彘？俺、どうなの？）」

泣いていた。

アロンが、上の人に電話をして数分後、上の人3人があわただしく駆けこんできた。

もちろん、ウイスキーは処分済みだ。胃の中に…

「……………（酒臭い…）んん！」

「……………ビクッ！（バレタ！？）」

「？…アルフレッドⅡバウムガルト少尉」

高級軍人の一人がアルのフルネームと階級を言う。

「は、はい！」



緊張したアルは、声が裏返っている。

「……貴官は、本当にISを起動できるのか？」

さつきとは違う高級軍人がアルに疑問を抱く。

「出来ます。」

「では、実演したまえ。」

ちよび髭が似合う高級軍人が、偉そうに命令する。  
実際に偉いのだから当たり前と言えば当たり前だが。

「はい（なんで、こいつらこんなに息あってるの？）」

嫌な顔一つせず、ISの起動を始める。  
キーン、先ほどと同じ様に起動する。

「おお！我がドイツでも……！」

高級軍人が感嘆の声を漏らす。

「……よし！それでは、貴官には本日付で黒ウサギ隊  
シュバルツエア・ハーゼ  
に異動を命ずる！」

ちよび髭の高級軍人がまたもや、偉そうに命令する。

「はい……」

アルは、この特別技術課には特別な思い入れがあり、  
今さらの異動は、かなり堪えるようだ。

その後、アルは二階級特進し、大尉となり  
黒ウサギ隊に異動していった。

特別技術課のメンバーは…

「行ってしまいましたね。」

「そうっすね。」

「……………（T—T）」

「なんか、寂しいですね。」

感傷に浸っていたら…

ひょこっと、高級軍人が顔を出している。

「……………（o）／！」

それに気付いたジャンが驚きのあまり、座っていた椅子から転がり  
落ちた。

「ジャン！どうしたんっすか？」

カーターが、ジャンを起こすとジャンは、高級軍人の方を指さす。

「？うおー！びっくりしたっす。」

「…無礼だね、君たちは…」

高級軍人の額には、青筋が出ている。

「申し訳ありません。」

似非紳士が謝るが、依然として高級軍人の額の青筋は消えない。

「まあ、いいだろう。」

君達4人もバウムガルト大尉と共に、黒ウサギ隊に異動だ。

大尉の強力な脅し 推しによって君たちの異動が決まった。」

高級軍人は説明するにつれて、どんどん顔が青くなって行くことからアルが、どんな脅迫したかを考えると身震いする。

「そういうことから、今日中に異動しとくように、では。」

そう言い残し、去っていく高級軍人。

「……」

そして、4人は無言のまま荷物をまとめて黒ウサギ隊に向かった。

4人は、確かに感じていた、次の日は波乱の一日になると…

## プロローグ（後書き）

感想待っています。

タイトルは、仮なので良いのがあったら教えてください。

次は、専用機が公開されると思います。

第1話〱ク、ク、クラリッサ（ドリランドのCM風に）〱（前書き）

タイトルは、気にしない方向で…

専用機公開は、次回で…

## 第1話く、く、クラリッサ（ドリランドのCM風に）

アルが、黒ウサギ隊の部屋の前に立ち、ドアをノックし、名前を告げると

中から黒ウサギ隊の一人だと思われる眼帯を付けた隊員が出迎えて、副隊長の所に案内すると言い出す。

「あなたが、アルフレッドⅡバウムガルト大尉ですか？」

「はい。そうです。（皆、眼帯付けてんな、俺も付けるのかな…？）」

アルは、興味深そうにその眼帯を眺めている。

だが、それは見られる側からすると、ずっと見つめられている様な気分になる。

「…では、こちらへ（な、何？何で、ずっとこっち見てるの？）」

「（ま、いいや。）」

そして、目を離す。

「…（何なの？ホントに…）」

見てただけで、過剰反応ではないか？と思うかもしれないが、ずっと女子しかいない環境にいたのだ、多少は、仕方ないというものだ。

そうこうしている内に、副隊長の居るという部屋に着いた。

「…こちらでお待ちしています。では、これで。（はあ…何か疲れた…）」

「はいはい」

そんな隊員Aの気持なんぞ、露知らずアルは、飄々としている。

「（副隊長か…ファーストコンタクトは、大事だからな…よし！）」

今さっき、最悪のファーストコンタクトを取ったことに全く気付くことなく

意気込みながら、応接室と書かれた部屋のドアをノックしようとする…

ガチャ、ドアがアルの方に開いた。

「へブッ！」

ドアにはじかれ、地面にヘッドスライディングする。

「おや？これは、失敬。遅いので、迎えに行こうとしたのだが…来ていたか。」

中から出てきたのは、アルのタイプ、ドストライクのクラリッサだった。

「…！（やばいぞ！、これは、やばい…タイプだ…）」

「?どうした?」

アルの熱烈な視線に気づき、手を差し出す。

「あ、どうも。」

手を取る。

「（あ、手すべすべだ。）」

起き上がると、当然手を離される。

「あ…」

「?...（何だ?何で悲しそうな顔をするんだ? そっいえば、こないだ読んだ漫画と展開が似ているな...）大丈夫か?」

「え、ええ!大丈夫です。申し遅れました。  
アルフレッドⅡバウムガルト小i    じゃなかった、大尉です。」

今さらながらに、挨拶をする。

「ああ、クラリツサⅡハルフォーフ大尉だ。  
同じ大尉だな、よろしく頼む。」

そう言って、握手するために手を差し出す。

「はい。」



アルは、その手を握った。  
真面目な顔で

「（うは！手綺麗だな！）」

いや、違った。ポーカーフェイスだった。

「今、隊長は不在だからな、私がいさつをした。  
それでは、早速で悪いが…専用機についてだが…  
武装については、自分で作るという事でいいのかな？」

「はい、構いません、むしろそうして下さい。」

「了解だ、では、明日の朝に格納庫にへ来てくれ、その時にISを  
渡す、では。」

クラリツサは、足早に立ち去って行く。

アルは、その後ろ姿を見ながら、ニヤケ…微笑んでいたら

「あゝアルさんだ」

後ろから、バルトの声がする。

「……（^^）／」

「おや、こんなところで何をしているんです？」

「なんか、ニヤけてないっすか？」

「どうやら、特別技術課の面々が来たようだ。」

「やっと、来たか！実はな…あ、やっぱ、何もなし。」

「歯切れの悪さに、疑問符を浮かべる4人。」

「どうしたんっすか？」

「らしくないですね？」

「……………（・・・）」

「何があつた？」

「いや、何も、それよりさ、明日ISのコアが一回ってくるぞ。」

「ここで、アルから爆弾が投下される。」

「ホントっすか？」

「じゃあ、溜まりに溜まったミサイルのテストが…」

「＼（＾o＾）／」

「これで、年が越せるってものですね。」

「ああ、年が越せるかどうかは、知らんが、ISのテストと偽ってミサイルのテストが出来るのは確かだな。」

アル達は、ミサイル、ミサイル言っている。

そして、その後、第458回ミサイル談義が始まり、オールナイトした5人だった。

第1話く、く、クラリッサ（ドリランドのCM風に）（後書き）

気付いたでしょうか？

作者は、ミサイルが大好きです！

だから、専用機は…

## 第2話（前書き）

タイトル、思いつかない。

## 第2話

次の日の朝、アルは、クラリッサの言うとおりにIS格納庫へ来た。  
目の下には、隈が出来ていた。

「（あゝ昨日は、オールした挙句、ワイン一瓶空けたからな…  
二日酔いだ…うぶっ！…薬飲も…）」

そして、内ポケットに手をつ込むと、瓶を取り出す。

「（ホントに効くのか、これ…）」

その薬とは、特別技術課は、各分野の変態から  
マッドサイエンティスト

選出されており、その中でも医療系も結構マッドてるアロンが、特別に作った

『二日酔いには、これ！キャベジ m k 2』という薬である。

効用は、二日酔いが一発で治る。眠気などの副作用等は、一切なし、  
使用制限もなし！

というまさに、酒に弱いサラリーマン達の味方なのだ。

パキ、クルクル、パカ、ごくごく

ドリンクタイプなので、飲みやすい。ちなみに、イチゴ味。 激まず

「！（なんだ…これ…？）」

アルに衝撃が走る。

「うおええええー!!! まっずー!!!」

胃の中の物をすべて吐き出し、すっかりしたアルだった。

そう、この薬は、激ますぎではかすには、居られないのだ。  
開発者は、こう語っている。

「二日酔いとは、はけば治るのでしょうか？  
でしたら、全部吐いてしまえば問題ないでしょう？ 私は、アルコール分解能力が非常に強いので  
必要ありませんが…」

つまり、こういうことだ。

胃の中からなら出るものねーだろ？ と

「（ま、まゝある程度予測できたが…マジか…けど、  
これですっきりした…もう一生使わないけど…）」

心なしか、顔色が随分良くなった。

すぐに嘔吐物をかたづけ、きれいにし、ファブリー を掛けておく。

「（これでよしー）」

その後、2、3分待つとクラリッサがやってきた。

「！おはようございます、姐さん。」

「おはよう、姐さん？」

「はい、姐さん。」

「まあ、いいだろう。（姐さん…同い年なのだが…）」

多少の疑問を抱えながらも、認める。

「さっそくだが、これが、貴官の専用ISだ。名前は、無い、勝手に決めてくれ。」

そして、ISのある扉を開く。

「おお！あ、それと、自分の事は、アルと呼んでください。」

「………わかった、ではアル、武装を入れといてくれ。終わったら見せてくれ、では。」

そう言つて、去っていく。

「はいはい」

嬉しそうな顔で言うと、にっこり笑う。

「…（何だ？何であんなにうれしそうなんだ…まあ、いつか。昨日、日本から輸入した同人誌、まだ読んでなかったな…読んどくか…）」

アルの事をすこしだけ、気に掛けるとすぐに、他の事に気を移す。



アルには、あまり興味がないようだ。

クラリッサがさり、アル一人になった格納庫で…

「よし、じゃあ武装を載せるか…」

5分後、とてもはやく終わった。

「それじゃ、アリーナに移すかな…」

クラリッサに連絡するのをすっかり忘れ、早速テストを始めようとする。

「おっと、その前に…」

携帯端末を取り出すと、一斉メールを例の4人に送る。

ピピピ

「これで、よし。」

すると、10分もすると全員が集まった。

「なんかあつたんすか？」

「…（＾o＾）／」

「なにするの〜？」

「まさか、ミサイルのテストですか？」

4人の息は、相変わらずあっている。

「ああ、今からいろいろなミサイルのテストを行う。」

アルのその一言で、4人は騒ぎ出す。

「ほいじゃ、先行ってるな。」

そう言つて、ISを展開し飛ばうとする。

「ちょ、ちよつとまってー！」

バルトがアルを止めた。

「ん？何だ？」

「なんで、IS展開してんっすか？」

「（・・・？）」

二人とも疑問を持っているようだ、何故か、アロンだけが、知ってるよみたいな顔をしていたのが  
むかついたので、あとで制裁を加えんとする。

「ああ、それはな      なんだ。」

「…なるほど…最高ですね！」

「＼（＾０＾）／」

「それは、すごいね」

「まあ、予想していましたが…（ホントにするとは…ISの武装がミサイルだけ…）」

そして、ISを展開し飛んで行こうとすると、今度は、クラリッサが入ってきた。

「（私とした事が、漫画を忘れるなんて…）すまない、忘れ物を貴官は何をしている。」

入ってきた瞬間に、アル、バルト、ジャン、カーターは物陰に隠れ、クラリッサをのがれたが、生贄にされた、アロンだけがクラリッサを見つける。

「…アルに言われてここに…（クッ、私を生贄にするとは…）」

アロンは、冷や汗をかきまくっている。

「アルに…？彼は…」

クラリッサは、部屋全体を見回すとアルの金髪が見えている。

「…いたな…バウムガルト大尉！」

「アルとよんでください、姐さん。」

アルは、思わず飛び出してしまふ。

「…武装が入ったら、見せろといったはずだが…」

「…？あ、ああ、すいませんでした。次からは、気をつけますので…今日の所は、これで…」

ススッとアルは、クラリッサに何かを渡す。

「！な、こ、これは…」

すると、クラリッサの顔が驚愕の色に染まる。

「いいだろう、では、武装のデータだけを渡してくれ。」

「はい、すぐに。（計画通り！）」

そして、アルはメモリーにデータを入れ、クラリッサに渡す。

「うむ、ではな。同志よ！」

がっちりと握手し、クラリッサは、帰って行く。

「はい！（ああ、手、柔らかかったな…ん？同志？…まあ、いつか。）」

クラリッサが帰って行くと、例の4人が集結する。

「なに渡したの？」

「…（・。・。）」

「すごいっすね！」

「それより、貴方たち、私を囿に使いましたね…？」

一人だけ、観点がずれているが全員気にしない。

「フフ、あの人は、最近流行りの腐女子という人種だと、聞いたのでな。」

あの人が、欲しがるような、本を渡したのだ。  
それより、許可も下りたし、テストするぞ！」

「やった〜」

「はやくやりましょう！」

「準備OKっす。」

「…（^O^）／」

4人から、そう告げられるとアルは、ISを展開しアリーナへ飛んで行った。



## 第2話（後書き）

ggっってしまった。  
すいません。

専用機の設定を次に載せます。

## 機体設定（前書き）

機体設定です。

一応、見て行って下さい。



## 機体設定

黒い焰  
シュバルツエア・フラーメ

ドイツで発見された、二人目の男性IS操縦者の専用機として開発された機体。

初期型AICを搭載しており、それなりに高性能。拡張領域は、ミサイルで埋め尽くされているため

他の武装を載せる事は、出来ないのが、欠点と言えば欠点。

武装：

8連ミサイルポッド×2

この機体の主武装というよりこれしかない。

ミサイル好きの変態によって作り出された武装。

IS用サバイバルナイフ×2

近接武器を載せるとアルが上からうるさく言われたので、しぶしぶ載せた武装、使う気はないらしい。

特殊ミサイル

ミサイル好きな特別技術課のもとで開発され、テストが延期され続けていた

超ハイスペックミサイル、いろいろある。現在確認できるのは、138機。これからも増えると思われる。

## 初期型AIC

ラウラの黒い雨シュバルツェア・レーゲンに載せられている

AICの初期型。

拘束能力が弱い。その上、最新のAICより、集中力を要するのでアルの様な、頭脳がないと若干きついかも…という感じ。

## 機体設定（後書き）

ミサイルが好きなもので…

### 第3話（前書き）

今回は、微妙です…作者としても

### 第3話

アルが、アリーナに飛び出すと、ISにアロンから通信が入る。

『アル？とりあえず、今日は、ISの拡張領域に入っている二つのミサイルのテストをします。』

「ああ、わかった。」

そして、アルが拡張領域を確認すると、試作ミサイルが二つ入っていた。

それ呼び出していた、ミサイルポッドに装填する。

『それでは、適当に何か出しますので、撃ち落としてください。』

アロンが、そう言うがアルは、ほとんどISに乗った経験がない。いきなり、そんな動く敵にミサイルをぶつけるなど、不可能なのだ。

「は？いや、ムリだろ？」

案の定、不可能だと告げるが、アロンはそんな事を気にするそぶりもない。

『できますよ、そろそろテストを始めたんですが…』

「…お前さ、なんか怒ってないか？」

アロンの言葉から、怒りを感じ取ったアルは、疑問を投げかける。

『いえ、全く。貴方達が私を囷に助かるうなんてしたのなんて全く、これっぽちも、小指の垢ほど気にしてませんよ!』

「めっちゃ、気にしてる!すごい怒ってるよ。」

『H A H A H A、K I N I S U R U N A!』

アロンが、手元にあったボタンを押すとアルの目の前にある、扉が開き

中から、おそろしい怪物が出てきた

「グオオオオオオ!!!」

雄たけびを上げて、牙をむき出しにして、今にもアルへ飛びかかるようにしている。

「…ゑ?あれ倒すの?」

アルの顔が青を通りこして、紫色になり、おろおろしている。

「…むう(こうしても埒が明かないな…と、とりあえず…)」

覚悟を決め、サバイバルナイフをその怪物に分投げる。

ISの補助を受けているため、とんでもないスピードで飛んでいるが怪物は、でこピンで弾き飛ばした。

「フン!…グルルル!!」

「(無理、無理無理無理、こいつは駄目だ…)」

アルの脳内では、デフォルメアル達がアラートを鳴らし続けている。

「ガオオオオオー!!」

ついに、怪物がアルに飛びかかった。

「イーヤアアアアアー!!」

アルは、絶叫しながらミサイルを打ち出す。

ズドドドドド、

ミサイルポッドから、ミサイルが飛び出す。

そして、怪物がミサイルを避けるが、クネっとながり追尾し着弾する。

ドガン

「グワアアアアー!!」

怪物は、戦闘不能となった。

「…威力高!?」

そう、とてもビッグな怪物を数発のミサイルで仕留めるのだから、そのミサイルの威力の高さが伺われる。

『ええ、今のが追尾型次世代ミサイルの試作機です。』

「ほうほう、やっぱミサイルはいいな、最高だ！どんどん行くぞ！」

『ええ！』

そして、この暴走した5人を止める事の出来る人間が居なく、テストは、夜まで続いた。

「うつ！つ、疲れた…もう、無理だ…」

「さ、流石につかれましたね。」

「…（…）」

「もうだめ」

「限界っす。」

5人は、ようやく暴走を止めた。

すると、タイミングを見計らっていたかのように、クラリッサが入ってきた。

「失礼する。」

その瞬間、アルの顔から疲れが吹っ飛び、むしろ、艶が見える。

「何ですか？姐さん？」



「おお、同志よ…っと今は、彼らに用事があるのだが…疲れているようだから

伝えてくれないか？」

「いいですよ。（姐さんの頼みならたとえ火の中…は遠慮したいな。）」

「では、彼らの正式な配属先が決まった。

黒ウサギ隊特別技術課、が彼らの新しい配属先だ。明日からは、その名乗る様に…

こう、伝えといてくれ。最後に、貴官は普通の黒ウサギ隊だからな。

」

「わかりました。姐さん。お疲れ様です。」

「ああ、それでは。明日以降また語ろうではないか。日本の文化について！では、明日朝に本部に来てくれ  
隊長からのあいさつなどを行う。」

クラリッサの眼は、輝いているように見える。

「え、ええ！」

「それでは。」

そう言って、今度こそ去っていく。

アルは、配属先に事をを4人に伝え、部屋に一人帰って行く。

理由は、簡単。

クラリッサに話を合わせるために、少女漫画及び同人誌等を覚えるためだ。

「（よし！勉強するかな！）」

合格と書かれた鉢巻きを締め、漫画を読み始めた。

結局、その日もオールナイトしたアルでした。

### 第3話（後書き）

これで、アルがどんどん変態となっていくんだろうと思つと、目から汗が…（笑）

#### 第4話（前書き）

何書きたかったんだか、途中から忘れてしまったので

何時も以上によみにくいと思いますが…どうぞ。

## 第4話

アル達、特別技術課の面々がミサイルのテストをした、次の日：

アルは、胃をキリキリさせながら、黒ウサギ隊の本部をうろついていた。

ちなみに、黒ウサギ隊は、ほとんどが女性で構成されているので男のアルは、結構珍しいものとなる。

ましてや、その珍しいものが一人で居るのならば、注目を浴びないわけがない。

「（…うう、姐さんどこだよ…）」

アルは、涙目になりながらも、しっかりとクラリッサを探している。だが、今回はクラリッサではなく、ラウラを探すべきだということを忘れていた。

「（…ホントにどこ…？）」

その後も、さまよい続けた結果、クラリッサを見つけることは、できなかった。

この時すでに、クラリッサに指定された時間は、とっくに過ぎていた。

「（…やっべ、時間過ぎてるよ…）」

すると、ついに隊員の一人が話しかけた。

その話によると、クラリツサは、この日非番で、休みの様だ。

「…マジで？」

「マジです。」

「じゃあ、どこに行けば？」

「隊長の執務室に向かえば問題ないと思います。それでは。」

その隊員は、淡々と話し終わると、颯爽と去っていく。

「ハア…姐さんいないのか…」

アルは、目に見えるほど落ち込んでいる。分かりやすく言うと、財布から福沢諭吉が一人旅立って行った感じた。

「（まあ、すっぱかすのは、不味いな…）…鬱だ。」

鬱になりながらも、しっかりと向かう。

5分後、多少さまよいながらも、隊長執務室とかかれたプレートが掛かっている、ドアをノックしようとする、

ガチャ、ドアがアルの方へ開いた。

「へブツ！（これは、姐さんの時と同じ…！）」

ドサ、アルは、地面に向かって垂直に落ちる。  
そして、そこに追い打ちをかけるかのように、小柄な少女がアルの

上に乗る。

「む？貴様は…？」

小柄な少女は、アルをよく見ると、黒ウサギ隊の制服を男様にカスタマイズした物を着ている。

「！（そうか、こいつが…）遅いぞ！30分も遅刻しているではないか！？」

こつちから迎えに行きそうになったぞ。」

小柄な少女にそう言われて、カチンと来ないほどアルは、大人ではない。

いや、年齢的には大人なのだが、如何せん精神年齢がえ？なにこれ？実年齢の1/3なんだけど？のであるから…

「（な、なんだ？このガキ？）何すんだこのガキ！」

こうなる。

「な！？ガキだと！？貴様、上官に向かってそんな口を聞いて…！」

「上官！？こんなみみっちいガキが、上官な訳ないだろうが！」

「みみっちい！？貴様…一度痛い目にあわないとわからんらしいな…！」

そして、小柄な少女がファイティングポジションになる。

「…ぷっ…お前みたいなガキに倒されるわけないだろ？…ぷぷ…」

アルは、この小柄な少女に負けるわけがないと言い張る。それもそうだ。

この少女の身長は、150センチ程度。

一方、アルは180センチ近くある。

これだけの体格差では、普通なにもできないに決まっている。だが…

「フツ、後悔するなよ!」

そういうと、アルの手をがっちりつかみ、ブン、と背負い投げの要領で

投げ飛ばす。

「え?ぬおわああ!?!?」

ドサ、本日二度目の地面への垂直落下する。

「…(やりすぎたか?いや、これくらいでちょうどいいのだ。うむ。)」

ほんの少しだけ後悔する少女だったが、ホントに一瞬だった。

「い、イテテ(いや、まじか?焦った)ケンカとか初めてなんだよね…

というより、ホント、暴力反対だ。全く弱い物いじめをして楽しいのか?最近のガキンチョは!」

「これでわかっただろう?(何をわからせようとしたのか、忘れたが…)」



「…ちつ、わかったよ。あんただれだよ？（おお！ひきこもりの弱り切った腰には、きつい…）」

「（舌打ち…とことん失礼な奴だな…）ラウラ＝ボーデビツヒだ。ちなみにここの隊長だ。」

そう告げると、アルはバツの悪そうな顔をして謝罪する。

「すみません。失礼な事を言つて。（隊長だもんな、めっちゃ強いわ…怖いわ…怖いわ…）  
自分は、アルフレッド＝バウムガルトです。」

「ああ、別に良い、これからもよろしく頼む。（なんだ、普通のやつか…よかった）  
早速だが、少し伝えたい事があるのだ。」

通信ではなく、直接言い渡したいという事は、結構重要なことなのだろう。

「ええ、構いません。」

「そうか、では、伝えるぞ。まずは、  
今、貴官が男ながらにISを動かせるという事は、隠ぺいされている。」

「ええ、わかっています。（確か、混乱を防ぐためとか言ってたな…）」

「そこでだ、IS学園から要請があつた。優秀な技術者が5人ほどほしいと…」

「…へえ、随分とピンポイントな要請ですね。」

「ああ、まるで見計らっているかの様だが、そこはいい。

我らドイツでは、貴官と特別技術課の5人を派遣することとなった。ついでに貴官の公表もする。」

ラウラから告げられる、短期間での異動命令。アルは、断る事を考えたが、

先読みされていたかのように、ラウラがその考えを断ち切る。

「ちなみに、拒否権はないぞ。命令だし。何よりも学園には、報告してある。」

「…はい。了解です。皆には、そう伝えておきます。」

「ああ、頼む。私も学園に編入が決まっているから、その時に一緒に行こう。」

「わかりました、伝えておきます。」

「頼んだ。それでは。」

そう言つて、去っていくラウラを虚ろな目で見ながら、アル自身も特別技術課に向かい、全員に事情を話した。

「…また異動つすか？」

「ようやく、腰を落ち着けるところが出来たというのに…」

「……（＜―＞）」

「…はあ、鬱だ」

反応は、各々違ったが、共通して落ち込んでいるのは分かる。

「わりい、じゃあ、しばらくしたら行くからな。準備しておいてくれ。」

（…ああ、姐さん成分が足りなくなってきたな…）」

「わかりましたよ。」

「了解」

「…（＋o＋）」

「…ジャン…どんな顔してんっすか？」

アルは、一応全員が了解の意を示したところで、部屋に帰り対クラリツサ用の漫画を読み始めた。

すると、アルの携帯端末にクラリツサから、メールが来た。

「？…（誰だ…！姐さんではないか！！なにになに？…明日、夜7時に私の

部屋に来てってくれて…え？、なんで？まあ、いいや。その時は、姐さんと

二人つきりだあ〜）フハハハッハハハハ、ゲ、ゲホゲホ。」

わかりましたと返信したのち、テンションMAXになったアルは、

その日、ずっと奇声を上げていたそう<sup>だ</sup>。

#### 第4話（後書き）

うまく、書けなかったな…すみません。

最近、主人公が天然鈍感という小説が多すぎて（自分も書きますが）食傷気味なので、今回は、ヒロインが鈍感と言っことで…お気に召さないのならすいません。元のコンセプトがこれだもので…

それでは、次回の更新で。

## 第5話（前書き）

いつもの倍の長さです。

## 第5話

アルが、クラリッサからのメールに舞い上がった次の日、朝は、普通に仕事へ向かった。

「（夜は、姐さんと一緒だ〜やべ、今から、緊張しちまう…）」

アルは、昨日からずっとニヤついていて、道行く人が気持ち悪い物を見る目で見ている。

それも、恋する乙女ではなく、恋する男には関係ない。

「〜（うはー あれ？今からどこ行くんだっけ？）」

すると、前方300メートルにクラリッサの姿があった。

「！（姐さんリーダーに反応が！？）」

ニユータイの様にピキーンと来たアル。

「今行きます！」

そして、クラリッサの方へ駆け出していた。

「ねえさーん！」

「む？アルか？」

クラリッサは、ズドドドと砂ぼこりを上げながら、走ってくるアルに

目を丸くしながら、突進してくるアルを冷静に避ける。  
その結果、アルは壁に激突した。

「グ…（さ、流石姐さん。…）」

「そうだ、アル。」

何かを思い出したかのように、クラリッサはアルを呼ぶ。

「なんですか？姐さん。」

「今日は、アルと昨日会ったと思うが、隊長の模擬戦をするらしいから、

とりあえず、隊長の執務室に向かってくれ。」

「わかりました、姐さん。それでは。」

「いや、私も隊長の執務室に用がある。一緒に行こう。」

クラリッサからすると、ただ一緒に行くだけの話だが、アルにとってそれは、とても魅力的な誘いだ。

「え！？はい！（うはー今日は、なんて良い日なんだ！）」

「では、向かうとするか。（それにしても、なんであんなにうれしそうなのだ？）」

数分後、アルとクラリッサはラウラの執務室に到着した。

「（ああ、この数分がとても短く感じる。ん？じゃあ、姐さんで行



動したら、

どこへ行くのも、短くかんじるのか？…まあ、いいや」

ノックし、中に入るとラウラが普通にデスクワークをしていた。

とても集中しているようで、アルとクラリッサが入ってきたことに気付いていないようだ。

「隊長。」

そこで、クラリッサがラウラに近づき、声をかける。

「ん？ああ、クラリッサか。すまん気がつかなかった。…？なんだ、アルフレッドも一緒か…」

「ええ、そろそろ模擬戦の時刻です。それと、例の件について話がまとまったそうです。」

最後の方は、アルにも聞こえない様に小声で喋る。

「そうか、もう模擬戦の時間か…その事は、また後で…」

初めの方は、わざと大きな声で話し、最後の言葉を隠す。  
だが、アルには通用しなかった。

「（例の件ってなんだ？…後で聞いてみるか。それにしてもこんなところで

役に立つとはな…カーターの発明品。）」

その電子機器の発明にマッドてる、カーターの発明品とは、

『これがあれば、気になるあの子の話もまるわかり！盗聴器！』

である。

細かい事を言うと、盗聴器ではないのだが似たようなもので、そう呼んでいる。

具体的にどのような物かと言うと、耳にワイヤレスイヤホンと

アルが今、手に持っている音を拾う機械である。

機械で、座標を正確に入力しなくてはならないので、使いづらいが、その

性能は、無駄に高い。

いわば、性質の悪い悪戯道具つと言ったところだ。

「（ホント、あいつらの発明ってどこで役に立つかわからないな…うんうん）」

アルが、そんな事を考えながら、感心しているとラウラが呼びよせる。

「おい、はやく行くぞ、豚。」

何故か、毒舌ラウラ。

「豚！？誰が豚だ、このミジンコ…！」

ラウラに意固地になって言い返すアル。

「な！？人のコンプレックスを…」

「はいはい、アリーナへ行きますよ。」

ケンカになりかける、二人をクラリッサが宥める。

二人は、渋々クラリッサに従い、アリーナへ向かう。

その道中にも、アルとラウラは何度か、ケンカになりかけ、そのたびに

クラリッサが、宥めるといふスパイラルが出来上がっていた。

そして、アリーナに着くとラウラがアルに話しかける。

「アルフレッド」

「何？」

「…お前も、黒ウサギ隊のはしくれなのだから、眼帯を付けなくてはならないのだが、  
今、ちょうど眼帯が切れている、IS学園に行くまでに用意するか  
ら待っていてくれ。」

「わかったよ。」

ラウラとアルは、お互いに喋ったら、ケンカになると学んだらしく、  
必要最低限の事しか  
話さなくなった。

「ああ、その事ですが、私の前使っていた奴がいますので、渡し  
ましょうか？」

クラリッサが、ラウラに提案をしたのだが、真っ先にアルが食いつ  
いた。

「なんですと！？是非、お願いします！！」

「あ、ああでは、また後でな。」

「はい！」

アルとクラリッサの会話が終わると、ラウラが不機嫌そうになっている。

「…（なんで、アルフレッドの対応は私とクラリッサとは違うのだ…）」

どうやら、すこし嫉妬しているようだ。

その後、アリーナへ移動し模擬戦を行った。

結果は、ラウラのぼろ勝ちのぼろ勝ち。

アルのミサイルは、ラウラのAICに止められ、レールカノンの餌食になるの無限ループをしたようだ。

「今日は、こんなぐらいにするか…」

（こいつ、戦略のなにもないぞ…ミサイルしかうってこないではないか）」

「ああ、…もう、限界だ。」

アルは、そう言って地べたに寝転がる。

ラウラは、その姿を見て、手を差し出そうとするが、どこからか特別技術課の4人が出てくる。

「あれ〜？、こんなところに寝転がって何してるんですか〜？」

「…（＾―＾）／」

「いいデータがとれたんつすよ。」

「それより、新しい薬『これを飲めば、疲れも一発でとれます！W  
A I N』がありますが  
いますか？」

実は、この5人ずっとアルを見ていたのだ。

「あれ？お前ら、どうしてここに？」

アルは、立ち上がり4人と一緒にどこかへ向かう。

「たまたまつすよ。」

カーターが、白々しくそう言う。

「（何を言う、ずっと陰から見ていただろうに…）」

ラウラは、それを聞きながら自分の思考に浸る。

「なんだよ、待っていてくれたのかと思っただじゃんか？」

「（ちゃんと、見守っていたのだから…それにしても、  
私にも、待っていてくれるような、仲間ができるのだろうか…）」

遠くから見守っているとクラリッサが、話しかけた。

「隊長、お疲れさまでした。」

タオルとドリンクを差し出す。

「ああ、ありがとう。」

今まで、ラウラから礼の言葉を言われた事がなかった、クラリッサは面喰った顔をするが、大声で喋るアル達を見て、納得した顔をする。

「いえ、（アル達は、いい影響を与えたようだな…）」

「では、仕事の話とするか。（まずは、近い人間からだな。）」

「ええ、では…亡国企業ファントムタスクがイギリスの最新鋭機を狙ったそうです。」

クラリッサから、そう告げられるとラウラは苦そうな顔をする。

「ついに動き出したか…対策を練らなくてはな…IS学園に向かう前に

対策を考えるとするか、では、明日対策会議を行う。各隊員を集め  
といてくれ。」

「了解しました。では。」

そう言って、クラリッサは去っていく。

「（む？もうすぐ7時だな…戻っておくか…）」

場所は、変わってクラリツサの部屋の前

そこには、アルが来ていた。

「（ついに来たな7時、楽しみにしたけど、いざ来てみるとこわいな…）」

アルは、チキンなのだ。

「！（そうだ、こういうときはあれだ。アロンからもらった薬を飲むもう）」

懲りずにまた、アロンの薬を飲むアル。

その薬とは、

『緊張？なにそれ？これ飲めば問題ないんですけど？ブランデー！』

である。

この薬？は、アルコール濃度が恐ろしく高い。

一升瓶を開けても、全く酔わない人でも一口でよってしまつぐらいだ。

つまり、酔って気を大きくしようという魂胆だ。

クイ

どこからか取り出したグラスに注ぎ、一口飲む。

「（うおおお、今ならなんでもできる気がする～～！～）」

気が大きくなったアルは、クラリッサの部屋のドアをノックする。

すると、すぐにクラリッサが出てくる。

「来たか、では、入ってくれ。」

クラリッサは、アルを中に通す。

そして、気が大きくなっているアルが、クラリッサに告白する。

「付き合ってください、姐さん！」

「? いいぞ、どこにだ？」

「……買い物に。」

自分への好意には、鈍感なクラリッサは、付き合う＝買い物の不思議方程式があるようだ。

「まあ、それはおいおい決めるとして、今日来てもらったのは、分かるか？」

「いえ、わかりません?」

酔っぱらっているアルに疑問を持つが、すぐに消える。

「まあ、そうだな。まず一つ伝えておく。

明日、ある事についての会議を行う。第3会議室に特別技術課の面々と

共に来てくれ。」



「わかりました。」

驚異のアルコール分解能力で、酔いが分解された様でしっかり了解の意を示す。

「うむ、では、本題に入る。今日は寝かせないぞ。」

はたから聞いたたら、卑猥な感じにしか聞こえないが、もちろんそう言った意味ではない。

「アルは、どんな漫画等が好きなんだ？」

こういう意味だ。

つまり、日本のサブカルチャーについて話したいのだ。その事に気付いた、アルは若干がっかりする。

「（そういうことか…）基本的になんでも読みますよ。」

「そうか！？そうか。では…」

こんな感じに、オールナイトした、アルとクラリツサでした。

## 第5話（後書き）

長くなってしまったのでgoodってしまいました、すいません。

金曜日は、忙しいので更新できません。すいません。

謝ってばかりですいません。

それでは、明日更新します。  
では、まだ。

## 第6話（前書き）

今回は、短めです。

## 第6話

次の日、アルはいつものようにジャンの発明品、

『これ、絶対め覚めるよ、だつてうるさいもん。』

まあ、簡単に言うと、目覚まし時計なのだが

如何せん、音がうるさいのだ。異常なくらい。

わかりやすくいうと、カラオケで音痴なくせに、熱唱する奴をつるさいな…と思うの以上につるさい。

だが、ワイヤレスイヤホンによって、その使う本人にしか聞こえないので

周りには、安心だ。

である。

「（おおう。やっぱうるせーな…まあ、一瞬で目、覚めたけど…）」

じんじんと痛む、耳を気遣いながら、第3会議室へ向かう。

「（あ！そうだ。あいつら呼んで、第3会議室行かないと…）」

途中で、方向転換し特別技術課の部屋に向かう。

ガチャ、ノックもせずに中に入ると、彼らはオールでFPSをやった直後だったらしく、目が死んでいた。ジャンを除いて…

後のジャンの横に居た、カーターによると、

「あいつは、ダメっす、ありえないっす。」

ガクブルしていた。

事情を聞くと、あきれたアルだったが…まあ、仕方ないかという感じになり

とりあえず、第3会議室に連行することにした。

「ほら、今日、大事な会議をするらしいぞ」

それだけでは、動かない特別技術課。

「いやっすよ、メンドイっす。隊長、ガンバッす。」

「今の状態で行けというのですか？」

「無理だよ」

「（＾Ｏ＾）／」

いや、違った、ジャンだけはやる気だ…

「（仕方ない…）そういえば、

今日、1970年のワイン空けようと思ってたけど…あいつらは、元氣ないみたいだし

ジャン、二人で空けるか？」

最終手段に出たアル。特別技術課は、別名、酒豪達の巣窟とも言われており、そのくらい皆、酒が大好きだ。

つまり、酒で釣るのは最も効果的と言えるだろう。

「元氣ハツラツ〜!」

「ファイトーイッパーツっす!」

「チオ、ビタ…あれ?」

約一名合っていないが、皆元氣が出たようだ。

「よし、皆元氣だな。じゃあ第3会議室に行くか。」

だまされたつという3人を、アルとジャンは引きずりながら、第3会議室へ向かった。

途中、人でなしや天使の面した悪魔などと、罵声を浴びせ続けられたが、アルは気にしない。

結局最後は、無抵抗でついてきたので、何もなかった。

第3会議室のドアをノックし、名を告げる。

「アルフレッド・バウムガルトと特別技術課の4人です。」

「入れ。」

「失礼します。」

クラリツサからもらった、眼帯を付け、何故かキリつとした顔をする、アル。

アロンが内弁慶めとかほざいていたので、アルはアンパン血を喰らわせ黙らせた。

「よし、時間通りだな。座ってくれ。」

クラリツサがアル達を催促する。

数分後、集まるべき人は全員集まり、会議が始まる。

「よし、では、会議を始める。クラリツサ。」

ラウラが、そう告げるとクラリツサが、言葉を受け取る。

「はい、今回の議題は、ファントムタスク亡国企業についてです。」

アル達5人は、あまり聞いた事のない名前に首をかしげる。

他の人たちは、あゝあれね、的な顔をしているので分かっているのだろう。

わからないのは、アル達だけの様だ。

「ファントムタスク亡国企業とは、第二次世界大戦時に成立した組織で

ほとんどが謎に包まれています。行動目的も一切不明なので、対策の取りようがありませんでしたが

今回、イギリスがISを盗難、いえ、強奪されたことから、ISが必要だという事がわかったので

ここ、ドイツの我ら黒ウサギ隊は対抗策を練ることとなり、今回の会議の趣旨です。」

そこまでで、一端言葉を切る。そして、タメを作り嬉々とした声で

喋る。

「そこです。黒ウサギ隊には、情報のエキスパートが入ったではありませんか。」

「彼です。アルフレッド大尉です。彼が、軍人になったのは、ハッキング技術が高いからに他ありません。」

だんだんと、某テレビショッピングのたか　の様な喋り方になって行くクラリッサに  
一抹の不安を覚えるアルだったが、さっきから口をはさめないでいる。

「なので、彼に亡国企業についての事を調べてもらい、後は、実動隊として

我々が動けば、よいと思うのですが、どう、おもわれますか？」

最後に、ラウラの方を向き、荒い息をしながら、問う。

「い、いいじゃないか！皆は、どうだ？」

当然、否定的な意見を述べる者などおらず、満場一致で決まった。  
アルの俺の意見は〴〵という魂の叫びは、全く聞こえていないようだった。

「よし、これで、会議を終える。アルフレッド大尉は頼むぞ。解散。」

こうして、アルの仕事がまた一つ増えたのでした。





## 第6話（後書き）

ちなみに、今、IS学園では、一夏がセシリアにフラグ立てているところですよ。

はやく、IS学園に向かわせたい…

それでは、次は、明日です。連載3本抱えるのは、なかなかきつい…

## 第7話（前書き）

さうしたけど、よろしくお願いします。

## 第7話

次の日、IS学園ではちょうど、鈴が登場している頃  
遠く離れた、ドイツの黒ウサギ隊の本部でアルが、ディスプレイと  
にらめっこしていると  
急にドアが開かれた。

ガチャ

「（誰だ？ノックもなしに、アロンか？）誰ですか？」

どうやら、アルの中では、アロン＝不法法の法則が成り立っている  
ようだ。

「あ、アルフレッド、日本へ行くぞ。準備をしろ。」

アルの予測？は、外れてアロンではなく、ラウラだった。

「は？なんで？」

「IS学園に行くのだ。」

「はあ？まだ、先の予定のはずだけど……」

アルがそう質問すると、ラウラの顔が引き締まり、真剣なものにな  
る。

当然アルもそれに気付き、ただ事ではないと悟る。

「…わかった。特別技術課の皆は？」

「了承済みだ。後はお前だけだ、早くしろノロマ！」

何故か、毒舌なラウラだが、このような口調で罵られたり、踏まれたりして

喜ぶ、俗に言うマゾ通称Mと呼ばれる性癖をアルは、持ち合わせていない。その上

精神年齢が、ラウラの実年齢より低い20代アルは、怒る。

「はあ？なんで、俺がお前にノロマ呼ばわりされなきゃいけないんだ？

そもそも、お前が昨日の内に言っとけばまだ、準備が出来たものを突然言うからだろうが！！

このちんちくりん！！！」

「なんだと！？貴様、そうとう私の靴の裏をなめたらしいな…！」

「誰も、そんな事言っていないだろう？お前の脳みそは、何ですか？カニみそですか？

おいしそうですね！？」

本当に、こいつら軍人と聞き返したくなるような低レベルの口喧嘩だが、アルの最後の一言で終わる。

アルの負けで…

「この、【閲覧規制】」(とてもひどい下ネタ。ラウラにとっては…)

「な、な、なにを言っているんだああ！！！」

アルのその言葉を聞くと同時にラウラが、アルに向かってドロップキック。

その体格差など、一切無視した非常なる蹴りがアルを抉る。アルは、そのまま吹っ飛んでいき、頭から壁につっこんだ。

「（ちょっとやりすぎたか…いや、そんな事はない。

さっきのは、最近流行りのSE K U H A R Aとか言う奴だろ  
う…」

でもまあ…）生きてるか？」

さっきのとは、【閲覧規制】のことを指しているのだろう。

ラウラが、生死確認をすると、アルは不死鳥のごとく復活する。

「大、じよ、うぶ…」

「いや、全く大丈夫そうには見えないが…」

「こ、ころを飲めば…」

そう言って取り出したのは、

『これを飲めば、どんな傷も一発で治る！マキロ 飲むタイプ！』

アロンが開発した、数少ない有能な薬である。

この薬は、おそろしいことにほんの5秒で重傷の傷も治ってしまうのだ。

ただ、使いすぎると、体内に耐性が作られてしまうので、3回が限界。

アルは、その貴重な1回を使おうとしているのだ、傷がそうとうな物だと容易に想像できる。

ゴクリ、薬をのどに通すと衝撃がはしる。料理漫画でよくありそうなあれだ。

「g k s えい で ゃ ん ヴ あ k d あ j」

謎の言葉を発しながらも、アルの体の傷はみるみる消えていく。現場に居たラウラは、言葉を失っていた。

「すみませんでした。もう口答えしません。どうか、ゆるしてください。」

傷が治るとすぐに、ラウラの前に来たと思うと今度は、頭を下げあやまる。

どうやら、ラウラに口答えする気は失せたようだ。

ちなみにこれは同時に、アルとラウラの力関係が確定したものだ。た。

元々、上官と部下の関係なんだけどね。

「いや、こちらこそ悪かった。すまん。日本行きはやはり見直すことにした。」

「…いいんですか？重要な事があるんじゃない？」

最初の話しでは、それなりに重要な用事があるように聞こえたことからの疑問だった。

「ああ、実はな…」

その後のラウラの話をまとめるところという事だ。

クラリッサと日本の話しをしていたら、日本の間違った知識を植え付けられ

すぐにでも、日本へ行ってみたいと思ったためである。

それは、即ちラウラが腐女子になった事を意味する。

それを聞いた、アルは…

「姐さん、あんたすごいよ…」（隊長を自分色に染めちゃったよ…でも、そんなところもいい！）」

と、一人のろけながら、歩いていた為周りの人の視線が痛かったのだが、

気付いていないアルでした。



## 第7話（後書き）

特別技術課の薬ってベンリーだわ  
って思っている作者です。

そういえば、今回、特別技術課の人たちでなかったな…

それでは、また。

## 第8話（前書き）

今回は、あんまり要らなかったかも…

## 第8話

ラウラとアルの力関係が、完全に決まってから早くも1週間が過ぎた。

そして、丁度この日は日本へ渡る日だった。

これまで、アルがISに乗れるという事実は隠されてきたが、ついにこの日

ドイツで正式に発表される。

記者会見場には、多くのゴシップ記事を書く会社から、世界に向けて発表するために

カメラまで用意されていた。

その舞台裏で、この記者会見の主役？のアルは、緊張でガクブルしていた。

「（や、やベーよ、ミスったらどうしよう…緊張してきた…

そうだ、アロンの薬は信用できないから、ジャンの薬を飲もう。）」

そう思い立ち、魔法の懐からなにかの紙を取り出す。

「（これか？紙じゃないか…！何か書いてある。）」

その紙には、

『人って文字を手のひらに書いて呑みこむを、3回したら緊張が取れる！…かも。』

と、書いてある。

「…それっておまじないじゃね？」

さらによく見ると、何かが書いてある。

『今、それっておまじないじゃね？と思った人つつこみの才能がないです。』

そう書いてあった。

「（つ、つつこみの才能…ない…）」

その言葉は、アルの心をブローケンするには、十分すぎたようだが、良くも悪くもこれで緊張が解けたようだ。

10分後、クラリッサが到着すると、orz状態だったアルは、復活する。

「おはようございます。姐さん。」

「おはよう。アル。緊張しているか？」

「いえ、微塵も。」

「おお、流石だな。心友よ。それでは、時間だ。会見場へ行くぞ。」

親友と言う部分で、アルの顔が赤くなるが、クラリッサは気付く様子もない。

「はい！／＼（し、心友だつて。！）」

「（なんで、顔を赤くするんだ？）」

そして、すぐに来たラウラと共に会見場へ行く。

すると、喧しいほどのカメラのフラッシュにアルは、顔をゆがめる。

それに動じることなく、ラウラとクラリッサが会見を進めていき、ついに

アルの話になる。

「そして、此方の彼が今回の記者会見の一版の目玉の、世界で二人目の

男性IS操縦者です。」

そう言った瞬間にフラッシュと会場のざわめきがピークに達した。

「紹介にあずかりました、男性IS操縦者のアルフレッド・バウムガルトです。

来週から、IS学園に行く事になっています。それでは、私はこれで。」

そう言つて、アルが立ち去るとラウラ、クラリッサと続いて出て行った。

舞台裏では、アロン達特別技術課の4人が居た。

「上々でしたね。」

「すごかったですよ」

「…＼（＾Ｏ＾）／」

「さすがすね。」

賛辞の数々をラウラは、切って落とす。

「いや、もっと頑張ってもらわなくては困る。」

これからも、こういった会見がふえるだろうからな。

それは、さておき出発するぞ。準備は、出来ているな?」

「出来てるよ。」

「よし、ではすぐに滑走路の所に来てくれ。」

「……はい（＾Ｏ＾）／」「」「」「」

それから、10分ほどで全員が集まり、黒ウサギ隊の専用ジェット機にて

日本へ飛んで行った。

## 第8話（後書き）

ということで、次回からは、新章に入ります。

ホント、今回なんだったんだろ？と思っています。

まあ、これでやっと原作突入できるので  
作者としても、うれしいです。

では、また明日。

## 第9話（前書き）

おっと、大分ぶってしまいました。

今回飛ばしても、問題ないです。



## 第9話

記者会見の次の日、ラウラと特別技術課の5人は、無事、日本入りを果たそうとしていた。

自由快適空の旅の中では、もうカオスだった。

乗り物に弱い、カーターが酔ってしまい、そこにアロンの薬を投与したら、その薬は例のキャベジ m k 2と間違えていて、カーターはリバーズ。

さらに、ジャン、バルト、共にもらいゲ をしてしまうという状況だったのだ。

なにはともあれ、なんとか無事に到着出来て一安心の6人だった。空港から、普通車で（下手にリムジン等で移動すると、目立つための処置）

しばらくの滞在先となる、ホテルに向かった。

ちなみに、このホテルは、ドイツ軍が極秘に手配したもので、従業員たちも、理解のある人間である。

部屋に着くと、ラウラは、どこかへ行くつもりのようなのだ。

ちなみに部屋割は、ラウラだけが、一人部屋で後は、全員同じ部屋に割り当てられた。

「では、私は出掛けてくる。」

「いやいやいや、目立つ事は、だめでしょ。それにその軍服で行くのか？」

荷物を置いてすぐに、そのままの格好で出かけようとするラウラを、アルは止める。

「…むう…では、どうすれば？」

「まず、服着替えろよ。」

「？これと、学園の制服しか持っていないぞ。」

着替えを催促するアルだったが、ラウラの爆弾発言に驚愕する。

「…え？いや、それマジ？」

「…なにか、不味いのか？」

それが、デフォのラウラにとって私服が無いのが、どれだけおそろしいかわかっていない。

「（編入するまで、制服を着させるわけにもいかないし、俺達は、男ものだしな…というよりサイズが…）じゃあ、編入してからならどこにでも

行けるから、その時に…」

「…（むう…しかし、軍服で移動は確かに不味いか…はやくメイトに行きたいというのに…）  
分かった、それまで待とう。」

なんとか、諦めてくれたラウラにアルは、ほっと息をつき、部屋に戻っていく。

「よし、じゃあ、俺達明日から、学園に来てって言われてるから…失礼します。」

「ああ、ではな…」

部屋に戻ると、アロン達がなにやら深刻そうな顔をしている。

「どうした？（ああ、もう、姐さん成分が足りなくなってきた…鬱だ）」

「アル…これを。」

アロンがそう言って差し出したのは、ノートパソコンだった。

「どうしたんだ？これが？」

至って普通のそのパソコンになにがあるのか、わからないようだ。

「よく、みてくださいます。」

カーターにそうせかされ、ノートを開く。すると、パソコン

「へブッ！」

一昔の漫画にありそうな、あのパンチングマシンが飛び出してきた。

「ひ、引つかかった〜ww」

「…（＜―＞）」

「…ぷっ！」

「全く…間抜けですね…ぷぷ」

そうやら、アルの反応を見て楽しみたいようだ。

「お、おまえらなあああ！！」

ぷるぷると、激昂し、枕を持つと思いつき振りかぶり、手始めにアロンへ投げる。

「腸をぶちまけろ！！」

時速300キロの速さの枕が至近距離で投げられるが…

「当たらなければ、どうということはない！」

そう言つて、サッと躲し近くにあった、枕を手に取りアルへ分投げる。

二人が、まくら投げをしているのを、横で見ながら、ワインを傾けるジャン、バルト、カーターでした。

ちなみに、まくら投げはその後、体力のない二人は、1分ほどで終わり、ワインを開けていた

3人と喧嘩が始まりと、とても楽しかったようだ。

## 第9話（後書き）

ホント、今回いきりませんね。

次回から、IS学園行きます。

では、また。

## 第10話

次の日、IS学園の校門前には、アル、アロン、カーター、バルト、ジャンの5人が

ミサイルについて語りながら、迎えを待っていた。

「いやね、俺はこう思っただよ、俺、ミサイルあれば、なにもいら  
ないって。」

「それについては、珍しく同意できますね。」

「いや、でもパイルバンカーも外せないっすよ。」

「そうだね。」

「…（＾Ｏ＾）／」

こんな感じの話しをしていると、いつの間にかヒートアップして、  
迎えに来ている

千冬さんに気付けなかった。

「おい、」

千冬さんが、凄みを利かせて怒鳴るが、アル達には聞こえない。

「聞け！」

ようやく、アルが反応する。

「誰だよ！俺たちは、真剣にミサイルについて話し合ってるの！邪魔するな。」

ブチッ！

千冬さんの血管の切れる音が聞こえると同時に、一夏が毎日のように喰らって喜んでいる  
出席簿が火を吹く。

バシーン、バシーン、バシーン、バシーン、バツシーン！！！！

誰が、一番強く叩かれたのは言わずにも分かるだろう、アルだ。

各々痛そうなポーズをとるが、一人だけ痛みへのたうちまわっている者がいる。アルだ。

「全く、お前達がドイツから来た、特殊例とそのお供か？」

「そうです。」

アルの確認が取れると、自己紹介をする。

「そうか、紹介が遅れたな、1年1組の担任、織斑千冬だ。」

「あ、どうも、アルフレッド＝バウムガルトです。よろしくお願いします、ミス織斑。」

「アロン＝バッハマンです。」

「カーター＝ベルグヴァインっす。」

「バルト＝ビッテンフェルトです。」

「∴ > m ( — ) m <」

「ああ、こいつは、ジャン＝ブロムベルクです。」

声を出さない、ジャンにムツと千冬さんがなったのをアルは、機敏にさっちし

ジャンのフルネームを告げる。

「∴うむ、では、バウムガルトには、私の補助として付いてきてもらうが、

他の者は、特別に技術室が用意されている。そこに居てくれ。何も無い時は、バウムガルトもそこにいろ。」

「了解です。」

そう言つて、アルと千冬さんは、去っていく。

残った4人は、それを見送ったのち、配布されていた地図を頼りに、特別技術課へ向かった。

アルと千冬さんが、向かった先は職員室と書かれたプレートがある所だった。

「えーと∴なんでここに？」

「お前には、ここの情報の教師をやってもらおうということになっている。」



だからだ、ここがお前のデスクだ、好きにつかえ。汚くはするなよ。では、次の所へ行くぞ。」

「はい。（あれ？教師？聞いてないぞ。それより、ミス織斑の机：魔窟じゃね？）」

顔には、出さないがとても失礼？なことを考えていたアルだったが何故かしら、千冬さんにはバレ、本日二度目の出席簿の攻撃を受けた。

「今、失礼な事を考えていたな？」

「い、いえ。滅相もございません！（え、エスパー？エスパー織斑（笑））」

「…そうか…」

全く納得している様子がないが、時間が押している様でこれ以上咎める気はなく

次の説明をする場所へ移動した。

その場所は、2年生の学園寮の寮長室と書かれた部屋だった。

「えつと…またですが…なんでここに？」

「前までここに居た、教諭が寿退職されてな…ちょうど欠員が出来ていたところだったのだ。」

情報の授業を担当してもらうのも、その関係だな。」

「へえ…つまり、その寿退職された方の埋め合わせをやれ…と？」

「そう言う事だ。では、これだけ分かっているならば当面は問題ないだろう」

明日は、朝の8時までには職員室に来てくれ。ではな。」

最後に来る時間帯を指定してから、千冬さんは去って行った。

「はい。お疲れ様です。（なんていうか…あれだな…仕事はちゃんとやる、厳しい人だな…」

そう言う人に限って、私生活はグータラしてんだよな…ww

おっとこんな事を考えてると、出席簿が飛んできそうだ、やめやめ。  
）」

アルは、割り当てられた部屋に帰ると荷物を置き、すこしかたずけると

千冬さんの人柄について考えていた。

そしたら、突如アルの携帯が鳴り響く。

「！誰だ？」

通話ボタンを押すと、掛かってきたのは、アロンだった。

「なんだよ。こっちは疲れてるの、切るぞ？」

めんどくさそうに言って、電話を切ろうとするが、アロンは必死に止める

『まって下さい薄情者。おっと間違えました、アル。』

「切るぞ！」

『すいません。それより、明日はそちらはどうになりましたか？こっちは

一日のノルマの武器を作れば、好きにしていって言われましたが……』

「…情報の教師をすることになった。」

『それは、また…まあ、詳しい話はまた後日にでもしましょう。それでは。』

「ああ、じゃあな。」

そして、通話を終わると見計らっていたかの様に、ドアがノックされる。

「はい（次から次へと何なんだ？）」

ガチャ

ドアを開けると、青色の髪をした女子生徒がいた。

「やあ、ボブ。ひさしぶり。」

「いや、ボブって誰だよ！」

「あなたよ？」

「疑問形！？」

いきなり、コントを始めた二人、実は、結構相性があつたりするのかもしれない。

「いや、ホント誰ですか？」

「この生徒会長の更識楯無です。」

更識と聞いて、アルの眉がピクリと跳ね上がる。

「わざわざあいさつに来てくれてありがとう、アルフレッド＝バウムガルトだ。よろしく。」

（更識：確か日本の対暗部用暗部とか、ミーティングで言ってた気がする…言ってなかったけ？

どちらにせよ、すこし警戒した方が良さそうだな…）

そして、握手の手を差し出す。

「ええ、よろしくお願いします。（ふーん、ドイツ軍人って聞いてたけど…特に何もなさそうね…

安心したわ。この人より、あのラウラ＝ボーデビツヒさんの方が、危険ね。）

楯無さんもその手を取る。二人は、すこしばかり性格が似ているようだった。

それから、楯無さんは二、三言話した後、自室に帰って行った。それなりに上機嫌だったのがなにやら腹が立つアルだったが、嫌いには、なれなかった。

楯無さんが去ってから、アルは旅のつかれやいろいろな疲れですぐに寝てしまった。

## 第10話（後書き）

明日は、金曜日なので更新できないかもしれません。  
今日中に、ストックが出来れば、明日更新できます。

千冬さんと楯無さん登場。

私の初投稿の方では、ヒロインだった人と途中で出てきて空気になった人です。

それにしても、なんでクラリッサをヒロインにしたんだろう？  
まあ、いいや。

それでは、また。

## 第11話（前書き）

金曜日だけど、更新出来ました。よかったです。

## 第11話

アルと楯無さんの顔合わせ及び千冬さんのチュートリアルの日、アルは、指定された時刻朝の8時の5分前7時55分には、すでに職員室で千冬さんを待っていた。

幸い、千冬さんも時間には厳しいタイプだったので、一切待つという事がなかった。

「む！早いんだな？」

以外という文字が似合う顔で尋ねる。

「5分前行動が自分の美学ですので…」

「以外だな…」

千冬さんがそう思ってしまうのも仕方がないことだ。

普段のアルを見ていると、時間にルーズな性格だと思われてしまうだろう

だが、彼は、こう見えても技術者だ、何かを作るのに熱中して時間を忘れてしまうことも多々ある。

そこから、なにか学ぶ物があっても、なにもおかしくはないのだ。

「まあ、そういうことです。」

「？まあ、いい。今日は、授業の時以外、私と共に行動してくれ。（そうでないと、生徒達の餌食になるのは



目に見えているからな…）」

「…ああ、なるほど、わかりました。」

アルは、千冬さんの意図を理解したようで、納得という顔をしている。

「うむ、（流石に、技術者だけあって理解力はあるようだな…よかった。）では、

そろそろ1年1組に向かうからな。」

時計を確認すると、もう8時30分。そろそろ、朝礼が始まるころだった。

「はい。お供します。長官。」

もちろん、冗談で言っている、千冬さんもB A K Aではないので気付いているが

その性格故、出席簿でブン殴る。どんな性格だよ！というつつこみはなしだ。

「織斑教諭もしくは、織斑先生と呼べ。いいな。次、長官と呼んだら殺す程度では、すまさんぞ。48の殺人わざと52のサブミッシヨンを連続でかけて…

地獄のローラーでお前を、ミンチにするからな…覚悟しておけよ…！！」

「え！？そんなに？マジで！！？？怖！（この人ならやりかねんぞ…！）」

「冗談だ。さつさと行くぞ、時間がない。」

「あ、ホントだ、急ぎましょう。」

時計は、8時40分を指していて、もう、朝礼が始まっている時間で職員室には、二人しか残っていなかったので、すぐに1組に向かった。

スタスタ、ダダッダ、ダダ

規則正しい足音と、不規則な足音が廊下に響いていた。

「…（ちょ、織斑教諭…はや…い）」

千冬さんは、とんでもなく歩くスピードが速いのだ。

アルは、走らないと千冬さんに追いつけないため、息切れまでしている。

そうこうしている内に、1年1組の教室に着いた。

中は、先生が来る前だけあって、今だに多少ざわついた雰囲気だ。

ガラ！

一切の躊躇なしにドアを開けると、ざわざわという雰囲気は、一掃される。

それは、即ちこのクラスに置ける、千冬さんの信頼度？が高い事が分かる。

シーンと静まり返った教室を千冬さんは、スタスタと進んでいく。

一方、あっけにとられていたアルは、立ちどまっていた。

「よし、それでは、朝礼を始めるっとその前に、何をしている、早く来い。」

そんなアルを、千冬さんは教室に呼びよせる。

アルは、ハツとなって、ふらふらと教室に入ってくる。

すると、千冬さんの影響で冷え切った教室の温度が僅かばかり上がった様な気がする。

何故なら、アルが男だからだ。

「…あ！ども、アルフレッドⅡバウムガルトです。情報の担当をすることになっています。」

自分の事は、親しみをこめて、皇帝陛下と呼んでください…じゃなかった、アルとよんでください。」

そして、アルの自己紹介が終わると、にわかにながっていた教室の温度がさらに上がる。

「き…」

「き？（き、何？）」

「「「「「きやあああああ！…！」「「「「「」

耳をつんざくような悲鳴が上がり、アルは思わず耳をふさぐ。

「（い？いい？）」

アルは、何があつたのか分からずに混乱している。

「いい！年上のお兄さん系！」

「織斑君との禁断の關係に…！くはあ…！」

「アル×一夏、一夏×アル…どっちもありね…ハアハア…！」

三点リーダーの使用頻度が、高いが気にしない。

それはさておき教室は、腐女子が騒ぎ出し、大変なことになった。だが、彼女らは失念していた、今が朝礼の時間だという事を…

「んん！」

シーン、咳払い一つで教室を平定する。

「よし、今日は、これといった連絡はない。では、朝礼を終わる。」

そう言つて、千冬さんは、外へ出ていく。

ちなみに、アルは次の授業が情報のため、教室に残っている。

その日の授業が、アルの質問攻めで終わったのは、言うまでもない。

## 第11話（後書き）

今回は、一夏視点のアルを書きたいと思っています。

モチベーションが持たなかったので、読みづらくなっています。

それでは、また明日。

## 第12話（前書き）

今回は、一夏視点です。

うまく書けたかな？元からうまくないですが…

## 第12話

side 一夏

画面の前のみなさんこんにちは。

そして、初めまして。織斑一夏です。

えゝ今日は、千冬n…織斑先生が朝礼に遅れてるだけど…

なにかあったのか？

コツコツコツ、ダダダッダダ

お！この足音は、まぎれもなくちふy… 織斑先生の物だ。

それより、後ろのこの足音は、なんだ？

たまに、ハアハアって声が聞こえるんだが…まさか！千冬姉の身に危険が！？

それは、ないか…どうせ、ち…織斑先生の歩く速さについていけないだろう？

はやいもんな。ていうか、いいのか。皆、喋ってて。そろそろ、来るぞ。

ガラッ

ドアが勢いよく開かれる。すると、すぐに喋り声が消える。

おっと、t…織斑先生が来てもった。

きりつとしないと出席簿に叩かれるからな。きりつとしすぎて叩かれるけど…

「よし、朝礼を始めるつとその前に、何をしている、さっさと入れ。」

すると、ふらふらと、金髪のスラッとした男が入ってくる。

誰だ？…ん？男？てことは…やばい！うるさくなる！

「…あ！ども、アルフレッドⅡバウムガルトです。情報の担当をすることになっています。」

自分の事は、親しみをこめて、皇帝陛下と呼んでください…じゃなかった、アルとよんでください。」

なかなか、面白いこというんだな…皇帝陛下って…どうやったら間違えるんだ？

自己紹介が終わり、教室の温度が上がる。  
そして、

「き…」

やばあい、来る。ソニックブームが！

「「「「「きゃああああ…！」「」「」「」

ぬおお！！耳ふさいでも通り越してくる…！！



ほら、バウム…ガル…ト先生だっけ？あっけにとられちゃってる  
て。

「いい！年上のお兄さん系！」

「織斑君との禁断の係に…！ぐはあ…！」

「アル×一夏、一夏×アル…どっちもありね…ハアハア…！」

初めのは、まだ良いけど…いや良いのか？それより、最後の二人！  
特に真ん中のやつ！なんで吐血してるんだ？

つと！今は、…織斑先生の管轄時間なんだ、声を出したら、殺され  
る。

皆、忘れてるのかな…？

「んん…！」

ち…織斑先生の咳払い一つで、静かになった…やっぱすごいのか？

「よし、今日は、これといった連絡はない。では、朝礼を終わる。」

それなら、朝礼しなくてもいいんじゃない？いや、なんでもないです。  
こう思った俺に、一にらみしてちふ…織斑先生は、どっかへ行った。  
こわかったな…なれないな…あのにらみ。

ん？バウムガルト先生は、まだ残ってる…授業か…ちょうどいい、  
話しかけるか！

「あ…ん」

「先生、先生！今、いくつ？」

話しかけようとしたら、後ろから遮られた。おい、空気よめって…なに？お前が言うな？気にしないでくれ。

結局、話しかけられずにこの授業は、終わった。ちくせう。

## 第12話（後書き）

一人称って難しいですね。私だけでしょうか？  
まあ、いいです。

次は、シャルとラウラが学園にやってきます。

それでは、また。

### 第13話（前書き）

二日空けてすいません。

## 第13話

アルが、1年1組との対面をした次の日の朝。

午前5時というちょうど、寝ている時にラウラから電話があった。

ピリリリ、ピリリリ、

「はゝい…あるふれっど」ばうむがるとです。おっはゝ」

寝起きで、テンションがおかしい。

「…しゃきつとしろ！全く…今日から、私が学園に行くからな。では。」

朝の5時にそれだけを伝えて、電話を切る。

「…」

アルは、切れた電話に何も気に掛けず、机の上に放り投げると、そのまま、ベットへダイブした。

だが、微妙な時間に起こされたので、眠れなかった。

「…寝れん…仕方ない、食堂開くまで技術課のどこ、行くか。」

結局、特別技術課の面々が居る所へ向かうことにした。

朝の早い時間帯だけあって、ほとんど人は居なかったので、注目を浴びることなく

特別技術課に到着する事ができた。

「ういゝ、大将ゝ生中一つ！」

「はい、生中一つね。まいどゝ…って！ちっがーう！！なにしにきたんっすか？」

アルのボケを拾ったのは、以外にもカーターだった。

「はいゝナイスつつこみゝ」

「…ゝ（＾o＾）／」

「…ゝ（＾o＾）／」 アロンだよ！

アロンが、ジャンのまねをしている事に何故かしら、すぐに気付いたアルは疑問を抱く。

「なにしてるんだ？アロン、ジャン。」

「（＜―＞）」

「（＜―＞）」 アロンだ（ry

「いや、わかんねーよ！」

流石のアルにも、同じ表情をされては、読み様がない。そんなアルに、救いの手が差し出される。

「あゝ、今アロンさん、急にジャンの気持ちを知らうとか言い初め

て…真似してるんですよ。」

「はあ、がんばるね、アロンも…（でも、あれじゃわかんねえんじゃない?）」

そして、ちらつとアルが時計を見ると、6時になるかならないというところだった。

「（ん）確か食堂つて6時に開くんだっけ?（ちょうどいいや、一緒に朝食へに行くか?）」

「…えーと、今日の所は、遠慮します」（注目、浴びちゃうし…）」

「そっか、わかった。じゃあ、俺一人でいつてくるわ。じゃな。」

そう言つて、すぐに去っていく。

「いつてら〜」

「（^^）／」

「（^^）／ アロン（ry」

「…がんばっす!」

「おう、じゃあ、またな。」

アルは、食堂へ歩いて行つた。

5分もすると、食堂へ着いた。ちなみに、アルは一夏達に居る、1年生の食堂ではなく

2年生の食堂で食事を取ることになっている。

食堂へ入ると、開いたばかりだけあって、ほとんど人が居なかった。アルが、食堂を見渡すと初めてこの学園に来た時、態々あいさつ？に来た、青髪の少女…楯無さんが居た。

「（うーん…話しかけてみるか…）」

そう思い立ち、楯無さんに話しかける。

「やあ、」

「ああ、先生。どうぞ。」

楯無さんは、話しかけるアルに正面の席を進める。

「さんくす。」

「ええ、はあ…」

「…？どうした？最近、いいことないし、給料下がるし…いいことない、

サラリーマンのようなため息ついて…？」

アルの容赦ない一言が楯無さんを決る。

「うぐっ！なかなか、言いますね。」

「…？そうか？それより、なにがあっただ？力になれるかもしれないぞ！」



「うーんそうね。…最近、やけに襲撃とかが多いんです。対策を練らないと…」

「なるほどね…まあ、月並みだけど…がんばれ！あ！そうだ。これ上げる。」

そう言っつて、懐から薬の入った瓶を取り出し、それを楯無さんに渡す。

「え？これは？」

「『つかれには、これ！リポビタミンDXmk3』だ！これを飲むと、疲れが一瞬で吹き飛ぶぞ！」

ちなみに、この薬には珍しく悪い副作用が存在しない。

「あ、ありがとございます。（著作権って言葉を知らないのかしら…？）」

「うむ、ではな。」

「はい、また。」

そして、アルは、食堂を出て教室へ向かった。



### 第13話（後書き）

遅くなったのには、理由があるのです。

更新が止まった最初の日、つまり18日ですね。

この日は、作者が大好きなSKE48の名古屋握手会があったのです。

朝の5時から行って、夜の12時に帰宅。何時書くの？

19日は、学校から帰るときに、カラオケへ行き、SKE歌っていたら

21時…帰ったら22時、小説書く気にはなれませんでした。

以上の理由から、無理でした…すいませんでした。

SKEいいよ。SKE…最高です。じゅりなかわいいよ。じゅりな

それでは、また。

## 第14話（前書き）

今回から、ポメラから書いているので、ディテールがあれですが…  
これから、がんばってポメラでもうまく見えるようにします。

## 第14話

アルが、楯無さんと朝食をとった後、  
1年1組の教室に行くと、のほほんとした  
生徒が話しかけてきた。のほほんさんだ。

「あゝ皇帝ちゃんだゝおはよゝ」

「おいおい、皇帝って…」

どうやら、はじめの自己紹介の時にアルが  
言った事をそのままとっているようだ。

「えゝだってそうやって呼べってゝ」

「うゝん、まあそうなんだけど…」

（なんか、この子バルトとキャラが似てるな…）

「まあ、いいじゃないかゝ」

「まあいいか…（なかなか、癒されるな…）」

キンコーンカーンコーン  
ちょうど、そのときチャイムになる。

「おっと、じゃあそろそろ、席に着いてくれ。」

「」「」「」「はーい。」「」「」

素直に返事をするあたり、千冬さんほど  
恐れられていないが、山田先生ほどみんなフランクに  
話しかけるといふ感じでもない…という微妙な  
立場のようだ。

アルに指示され、ちゃんと席に着く生徒たち、  
そこで、アルは席が二つあいている事に気づく。

「ん？あれ？この席あいてるのか？  
何か知ってる？織斑くん。」

「え！？そこ俺に聞くんですか？」

「いや、あの先生の弟だし、なにか知ってるかな？  
みたいな？」

この二人のやりとりをみて、1組の教室は  
笑い？が絶えない。

「いや、知らないですよ。」

「そうか、というか、織斑先生は、まだか？  
おっせな？なにやってんだ？」

よくよく、考えたらアルの様なしゃべり方の先生  
ってあんまり多くなさそうなのに、違和感なく  
とけ込んでいる。

「まったく、歩くのばっか早いんだよな、

あの暴君。」

アルが、暴君と言ったあたりから、  
クラスが静まっている、だが、それに気づかない  
アルは、どんどん言葉を続ける。

「ほんと、暴君とか乙だね。」

「ほう！だが、暴君だ？」

後ろから、とんでもない威圧感を放つ千冬さんが  
出席簿を構え、たっていた。その後ろには  
あわあわと山田先生がおろおろしている。

「お…織斑先生…いつから？」

「おまえが、暴君とか言っていたところからだな…  
で？だが、暴君なんだ？」

こう言っている時点で暴君である…

「いえ、言っておりませんよ。それより  
朝礼を始めた方がよいと存じますが…」

冷や汗だらだら書きながらも、何とか冷静を保つ  
ことができたアルだった。

「…ふん、まあいい。では、山田先生、朝礼を。」

「は、はい！」

「（結局、人任せかよ！）」

こう思っている二人は、当然アルと一夏である。  
思考の読まれた二人は、仲良く千冬さんの制裁を受けていた。

「え、えつとですね。今日は、転校生がきます  
しかも二人ですよ！」

「えつ！？」

クラスの反応は、一致して皆驚いていた。  
彼女たちの情報ルートをかいくぐって来たのだ  
驚かない方がおかしいくらいだ。

「では、入ってきてください。」

そして、一人目の転校生が入ってきた瞬間に  
クラスは、固まった。

なぜなら、その入ってきた転校生が男だったのだから…

「フランスからきました。シャルル・デュノア  
です。よろしくお願いします。」

その中性的な顔立ちと屈託のない、いい笑顔が  
愛重なり、このクラスの女子たちのハートを  
鷲掴みにした。



## 第14話（後書き）

次に続きます。

書く事がない…次から、S K Eについてかたろつかや…すみません。  
それでは、また。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1007z/>

---

黒ウサギ隊の5人組（仮）

2011年12月21日18時52分発行